



46cmウーファーを搭載したバックロードホーンで増幅された低音は両サイドの縦のスリットから斜め前方に放出される。左側のスリット上部にはアッテネーターが3個取り付けられている。



本体は美しい外装の外箱とユニットが装備されたクリプシュ型バックロードホーンの中箱の2重構造となっている。フロントはヨーロッパの高級家具調のキャビネットにアーノルド・コックのデザインの真鍮の全飾りが施されている。当時キャビネットの色はマオガニーの他にブロードと呼ばれる少し黄色い仕上げのタイプもあった。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。ここ数号は大型コーナースピーカーを連続して登場しているが、JBLの初期型ハーツフィールド、TANNOYの英国オリジナルAutographに続き、今回はElectro VoiceのPatrician 4をご紹介します。

本文 / 田中伊佐寛
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林新彦(彩虹舎)

Patrician 4

Patrician システムは1952年頃に発表された Electro Voice 社のフラッグシップモデルの4ウェイスピーカーシステム。その後システム構造や搭載ユニット、外観デザインが変更されながら、最初期のThe Patrician、Patrician 4、Patrician 600、700、800と続き、1983年に開発された最終型の Patrician 2 まで生産された。The PatricianとPatrician 4 は正面デザインもほぼ同じ。共にクリプシュ型の折り返し型バックロードを採用し、46cmウーファーを搭載した4ウェイシステムだが、特に Patrician 4 は重要な中音域の音色が滑らか。繊細なフェリックスダイアフラムを使った828 / HFDドライバー が2本とT25ドライバー / 6HD ホーンが搭載されており、その荘厳で豪華な外観と圧倒的なスケールのオーケストラサウンドの再生音は当時から他にその地位を許さなかった。



Electro Voice

1927年にアメリカ ルイジアナ州のサウスベントに AL Kahnと Lou Burroughs の2人によって設立される。当初はラジオのメンテナンスサービスがメインだったが、当時その高い技術力によって競技場で使うPAシステムを開発。このシステムが Electro Voice と呼ばれたことが社名の由来となった。その後マイクロフォンの開発で高い評価を得て急成長していき、1940年台頃からは家庭用のハイファイオーディオのスピーカーメーカーとして大小さまざまなタイプのシステムやユニットを開発していく。現在は特にPAスピーカーの分野で有名なメーカーとして知られている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

Electro Voice



Patrician 4の当時のカタログもストックしてある



正面の真鍮飾り。バーを止めるビスの中に飾りネジが4本あり、それらを外すと正面の真鍮飾り部分全体を前に外すことができ、それぞれの4ウェイ用ユニットはこちらから装着できる



当時はまだモノラル再生の時代なのでコーナータイプとして開発されており、後ろの両サイドが斜めにカットされている。3枚のリアパッフルを外すと中に本体キャビネットが見える仕組み。



正面のロゴマークはThe Patricianと印字されている



当時の製品ステッカー。紙製で60年ぐらいここに付いている。モデル名のPatrician 4の最後の4の部分が残っている

弦楽器のボディのように響く
三日三晩でも聴いていらられる

大型スピーカーを惹る漫遊はまだまだ続く。

昨年夏にヴィンテージ・タンノイを取材させてくれたMさんが、新しいオーディオルームを地下に作ったという。その部屋は30畳近い十分に広い部屋だったため、なんでまたと思いつつ、再訪してみるとその新しい部屋はもっと広大でちよつとしたシアターのような感じだ。高さは5mもある。地下1階の床をぶち抜き、地下2階とつなげたという信じられないオーディオルームだった。

そこにタンノイを入れるのではなく、また別にシステムを組んでいる。部屋の両側に立っていたのはエレクトロボイスのバトリシアンIVだった。18インチのウーファーを入れたスピーカーがこれほどに小さく見えたのは初めてだ。それだけ部屋が広いわけだが、その環境が極めて当を得ていることをすぐに実感することになる。

ムターによるチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」がかかる。指揮がカラヤンとくればオーケストラはウィーン・フィル。ちなみにバトリシアンを鳴らすアンプはマフケンツッシュでプリがC22で、パワーがMI-75だ。

つややかなヴァイオリンが中央に立ち上り、それを包むようにしてウィーン・フィルが部屋を響かす。これが初めてではないが、ああこれが本物の音なのだ

と思った。4ウェイの5スピーカーで、形状が複雑なホーン構造になっているが、そういうことは感じさせず、すべてのユニットの音がうまく空気に溶け込んでいた。ひとつの大きなフルレンジスピーカーのように統括されている。リスナーまでのたつぷりした距離や大きな部屋がそうさせているのだろう。

続いてマイルス・デイヴィスの1958年のセッションから「オン・グリーン・ドールフィン・ストリート」。デリケートなユニット・トランペットはエッジがシャープ。サクソスのソロにも芯がある。あたかもエンクロージャー全体が楽器のボディのように響く。このトーンが最高に気持ちいい。

最後はヴォーカルで締めくくるところにした。ベギーリーの「フランク・コビー」は妖艶。濃厚なリスナーは求めがたどと思うが、想像以上に歌声に無駄な力(脚色)が入っていない。社名に「ヴォイス」と入れているから、やっぱり声がいいのだというベタがことを考えてしまった。すごくナチュラル。三日三晩でも聴いていられる。

このバトリシアンは以前、どんな境遇で鳴っていたかは知るよしもないけれど、この部屋に入っておそらく水を得た魚のようになったのではないだろうか。それ相応の住みかを定めたヴィンテージ・スピーカーは底知れない実力を発揮する。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回はエレクトロヴォイスの中型システム「Regency」と「Aristcrat」を紹介しよう。

第35回 Electro Voiceの中型システム

本誌の56号でも紹介した Electro Voice 社は1927年アメリカのルイジアナ州サウスベントに設立され、欧米のオーディオ全盛期である1950～60年代に人気を博した。アメリカ東海岸を代表するスピーカーメーカーで、JensenやBozak と肩を並べる存在だった。1950年代に入ると家庭用の高級オーディオで各社が競い合う時代になりElectro Voice 社も大型の PatricianやGeorgianをはじめ、大小さまざまな美しい家具調のスピーカーシステムを開発している。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



Regency

Regency は1954年頃にPatrician のような豪華な真鍮の飾りをまとった家庭用の中型システムとして開発された。キャビネットは後ろの両コーナーに斜めに角度を付けたコーナータイプで、内部は簡略されたバックロードシステムになっていてユニット構成は38cmウーファーを搭載した2ウェイまたは3ウェイのシステムとなる。その組み合わせは数種類あり、当時はユニットをセミオーダー的に選ぶことが可能で、38cm コアキシャル2ウェイユニットの15TRXがスタンダードなシステム。これにT-25 / 8HD を付けた3ウェイタイプや15W ウーファーに単体でT35トウイーター、T25 / 8HD ホーンドライバーを搭載するシステムも可能だった。



Aristcrat

当時最も人気のあった上級機「Regency」と同じ時期に開発された小型の高級システム。フロントのデザインは「Regency」に似ているが、キャビネット構造はこのシステム特有のクリプシュ型のバックロードホーンシステムが採用されているため、小型ながら伸びのある低音再生を可能にしている。ユニット構成は30cm 2ウェイ・コアキシャルユニット12TRX がスタンダードな組み合わせだが、12WウーファーにT35、T25 / 8HD を搭載する3ウェイ構成も可能である。

「Regency」を正面から見たところ。グリルは真鍮の飾りが美しく、横に倒して下に引き下ろすとユニットパツフルが見えてくる。両サイドはスリットになっており、簡略型の低音用バックロードの開口部がみえる。箱を部屋のコーナーに設置すると低音開口部から放出される低音が壁によって増幅される

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Electro Voiceの中型システム



「15TRX / 12TRX」。38cm コアキシャルユニットであるSP-15 / SP-12 タイプのウーファーのセンターに T35 トウイーターを搭載。初期型は外付けのX36ネットワークが付属し、後期型はマグネットカバー内部にネットワークが内蔵され、アッテネーターが付属している

「T-25 / 8-HD Horn」。上級機の patrician にも搭載されているミッドレンジホーンドライバーでT-35トウイーター同様に金属製ではない樹脂製のフェノリックダイアフラムが採用されているため、耐久性も高く滑らかな音色が特徴である

3,500HzでクロスするT-35トウイーターの専用ネットワークX-36

800HzでクロスするT-25 / 8HDホーンドライバーの専用ネットワークX-8

まさに好みのサイズ感で
実在感をもろに生み出す

いまだから25年くらい前、エレクトロヴォイスからアリストクラットなるスピーカーが発売されて、少々興味を持ったことがあった。その頃はちょうど2ウェイのホーン型スピーカーに憧れていた時期だった。それを買うのは予算的に無理だったが、未練なく決別できたのは、ショップの人から、元はオリジナルモデルがあつて名前を踏襲したことを教えてもらったためだ。なんだ二番煎じかよと青臭いこだわりが僕にはあつた。

この連載を続けているうちに、いつかはと少し思っていたが、ようやくその「二番煎じ」にお目にかかることができた。まずプロポーションがいい。このところ、スピーカーの大きさは、ひなびた温泉旅館の冷蔵庫くらいが程よいという思いが募っている。そのことを人に言うとデッカイの使っているくせに、よく言うよみたいな顔をされる。オーディオは上昇飛行から水平飛行に入ったとき(いまの自分)、システムはその人の無理がないサイズへ自然に収斂されていくように思うのだが、摂理としてはどうなのだろう。まあともかく、アリストクラットの量感感僕好みの好みである。さっそく音出しを始める。ヴィンテージ・システムの難関ともいえるECM録音に決め、キース・ジャレット・トリオの「イエスタデイズ」をかける。意外にいいのではなく、そのまま普通がいい。30cm同軸2ウェイだから、そんな

なに高音が出ていくわけではないはずだが、ドラムのシンバルはしっかりと伸びている(あるいは伸びているように聴こえている)。このトリオはインタールプレイが持ち味。3人がばらけずに一体感を保持して前に突き進んでいく感じがちゃんと出ている。

再び苦手と思えるロックでイエスの「ロンリー・ハート」を聴く。これは逆に重たいベースが出るかどうか。まったくヴィンテージっぽくない、パシバシとビートが決まって痛快だ。

次にスピーカーをもう一回りか二回り大きい、同じエレボイのリーゼンシーに変える。そのままイエスを聴いてみる。アリストクラットの小気味がいい鳴り方もいいが、さすがに15インチウーファーには余裕がある。同じ曲なのに、あたかもももっと大腿で歩いているようなテンポに感じる。

エレクトロヴォイスというくらいだから、声を聴かないと終われない。中島みゆきのライヴ「歌旅」から「ホームにて」をかける。両スピーカーに共通している点をはっきり意識するのだが、音がこちら側近くにあつて、もろに実在感がある。そして声、旋律、歌詞が真に迫ってくる。取材を忘れて、曲のなかに入ってしまった。素晴らしいオーディオほどその存在を意識させないものだ。リーゼンシーにとって皮肉な時間が過ぎていった。